

# 琉球大学学術リポジトリ

## 中学校生徒の家庭における食環境の実態（第1報）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2009-12-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森山, 克子, Moriyama, Katsuko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/13714">http://hdl.handle.net/20.500.12000/13714</a>

# 中学校生徒の家庭における食環境の実態（第1報）

森山 克子\*

A Survey of Household Dietary Environment for Junior High School Students (No.1)

Katsuko MORIYAMA

## 要旨

学校給食から沖縄の食文化継承をめざすことを目的として中学校生徒における家庭の食環境を明らかにする質問紙調査を行った。対象者は、N市のK中学校の中学生1・2年生男女262名にアンケートを依頼し237名の回答を得た。回収率は90.5%であった。本報では食環境を家族構成、主な食事の担い手、食事の担い手の年代、食事の担い手の就業状況、仏壇の有無、近隣に祖母在住の有無等を調査した。これらの調査の結果、次のことが明らかになった。

- 1) 核家族が79%、拡大家族が21%で同居する人数は平均4.9人であった。この数値はN市の1世帯あたりの人員2.51人に比べ著しく多かった。
- 2) 同居者の構成は、母親が91.5%、姉弟が88.9%、父親73.4%、祖母が18.8%の順であった。ほとんどが母親や姉弟と同居であったが4人に1人は父親不在であった。
- 3) 主な食事の担い手は母のみが71.3%、祖母のみが9.3%、父と母が6.3%であった。
- 4) 生徒と同居で食事を担っているのは、母親が94.0%、祖母が75%、父親が13.8%であり、ほとんどの中学校生徒の食生活は母親と祖母により担われていた。
- 5) 食事の担い手の年代は、30代が37%、40代が29%、50代が29%であった。
- 6) 食事の担い手で有職者は74.7%、無職が24.9%人、終日勤務が45.6%、パート勤務が22.8%であった。
- 7) 仏壇の有無は、仏壇がある生徒は62%、ない

と答えた生徒は38%であった。

- 8) 祖母との関係は同居が18.6%で、非同居が81.4%であった。「非同居で近隣にいる」が42.2%で、60.8%の生徒が祖母と同居または、近隣在住であった。

## 1 背景と目的

平成17年6月食育基本法が制定され、国や地方公共団体、関係団体等が連携し、国民運動として食育を推進することになった。

同法で「食育」とは生きる上での基本であって知育、徳育、体育の基礎となるべきもので、さまざまな経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てることと定義された。

「食育」という言葉の概念は、単なる食生活の改善だけでなく食を通じたコミュニケーションやマナー、自然の恩恵に対する感謝の念と理解、優れた食文化の継承など、広範な内容が含まれている<sup>1)</sup>。

食育の推進が求められている背景には、「食」を大切にしている心の欠如、栄養バランスの偏った食事や不規則な食事の増加、肥満や生活習慣病（糖尿病等）の増加、過度の痩身志向、「食」の安全上の問題の発生、「食」の海外への依存そして伝統ある食文化の喪失等がある<sup>2)</sup>。

1995年、沖縄県は「長寿世界一地域」を宣言したが、2000年厚生労働省は、沖縄県の女性の全国一位は揺るぎないものの、男性は二十六位になったことを発表した<sup>3)</sup>。地元では「26ショッ

\* 琉球大学教育学部生涯健康教育コース

ク」として受け止められ深刻な問題となった<sup>4)</sup>。鈴木は、その要因として、若い人のライフスタイルや食生活の変化が寿命の短くなったことの原因だとし、今まで野菜をふんだんに摂取していた沖縄の伝統食とは異なり、中年以下の世代はファーストフード等の肉や脂肪分を多量に摂取している傾向があると指摘している<sup>5)</sup>。また、2007年12月厚生労働省は2005年都道府県別平均寿命を公表した。沖縄の女性は平均寿命86.88歳で七回連続全国首位を維持した。男性は78.64歳で2000年の前回の26位(77.64歳)から25位とわずかに順位を上げた。<sup>6)</sup> これまでの沖縄の長寿を支えてきたのは、伝統的な食文化を日常的に実践している高齢者であり、中年以下の世代では、洋風化が急速に進み伝統的な食生活は徐々に崩れていると考えられている。

子どもにおいては、生活習慣病の誘因である肥満傾向(ローレル指数160以上)は、「沖縄県学校保健統計調査(平成10~15年度)」によると男子の場合入学年度別に比較すると平成元年より平成10年度入学の子どもの占める割合が高く、年々肥満傾向の児童生徒が増えている。女子の場合は、年齢を追う毎に肥満傾向児の占める割合が増加する傾向にある<sup>6)</sup>。

著者は、沖縄県教育委員会で学校給食・食育を担当する主任技師として県内各地の学校給食の視察、指導した経験を有する。本県の子どもは、都市地区、離島地区を問わず、野菜をふんだんに使用する沖縄の郷土料理は残量が多く、洋風や肉類等脂肪分が多い献立は、残量が少ない傾向があることを実感していた。肥満や生活習慣病の予防のため子どもに日本型食生活を子どもの頃から刷り込むことは大切であると考える。年間200日ある学校給食は、子どもの生涯にわたる健康づくりや食文化の継承の大切な学習時間である。また、長寿県復活のため学校給食において郷土料理や食文化を伝承し継承することは、非常に重要であると考えられる。

そこで著者は、中学校生徒の望ましい食習慣の形成、自己管理能力育成をめざすとともに、学校給食から優れた沖縄の食文化継承の方策を提言する基礎資料を得ることを目的として中学校生徒、その親、祖父母を対象にその食生活に

関して沖縄本島の教育行政地区別に調査を行った。本報では、家庭における食環境について那覇地区K中学校生徒を対象に調査した結果をまとめたのでその実態を報告する。

## 2 方法

2006年1月に那覇地区A中学校1年生(男子51名、女子64名)、2年生(男子65名、女子82名)計262名全員を対象に質問紙(無記名式)を学級活動の時間等に配布、回収し分析を行った。質問内容については協力校の管理者に事前に説明してその承諾を受けた。また、対象者の保護者に対しては紙面にて調査の目的、内容等を示して配布し協力を求めた。以上のような経緯を経て回収した質問紙の回収率は、90.5%(237名)であった。沖縄の食文化継承の方策を探る研究であるため、中学校生徒の家庭における食環境を本調査では、家族数、家族構成、現在の同居者、主な食事の担い手、食事の担い手の年代、仏壇の有無、近隣に祖母在住等の有無とした。

## 3 結果

### (1) 中学校生徒の家庭における食環境について

#### ① 家族構成人員

K中学校の学生が同居する構成人員は、2人~11名であり平均4.9名、標準偏差1.364であった。平成17年度国勢調査によるとN市の1世帯あたりの人員は、2.51人であった。N市の平均家庭と比べると2.39ポイント高く子どもの数が多い。(図1)

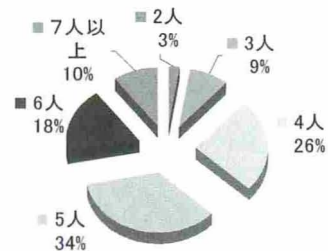


図1 あなたは、何人家族ですか (n=237)

② 家族構成（核家族と拡大家族の比率）

ひとり親（片親）と子、夫婦と子の単独家族で生活している核家族（2世代同居）が、79%で、祖父母、叔母、叔父等の拡大家族（3世代同居）の割合は、21%であった。（図2）

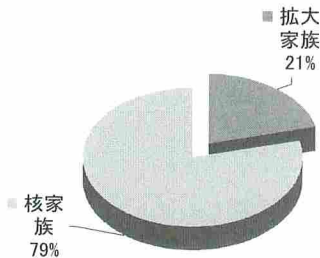


図2 中学校生徒の同居する世代 (n=237)

③ 中学校生徒の同居者

同居者については、母親で91.6%、次いで兄弟が86.9%、父が73.4%、祖母が18.6%、祖父12.2%、その他6.8%であった。その他は叔父、叔母等であった。おおよそ4人に1人は父親が不在であり5人に1人は祖母が同居していた。中学校生徒の9割は母親と同居していた。（図3）

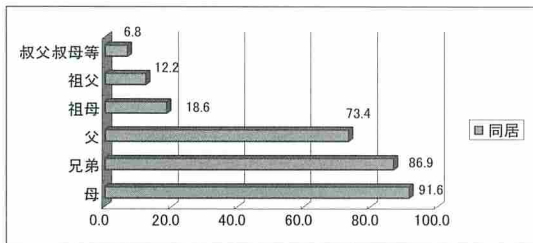


図3 中学校生徒の同居者

④ 主な食事の担い手について

生徒の主な食事の担い手は、母のみが169名（237名中71.3%）、祖母のみが22名（237名中9.3%）母と父が15名（237名中6.3%）、母と祖母が11名（237名中4.6%）父のみが5名（237名中2.1%）の順であった。この結果から中学校生徒の食に関しては、主に母親と祖母が担っていることがわかった。父のみが5名（237名中2.1%）であった。（図4）

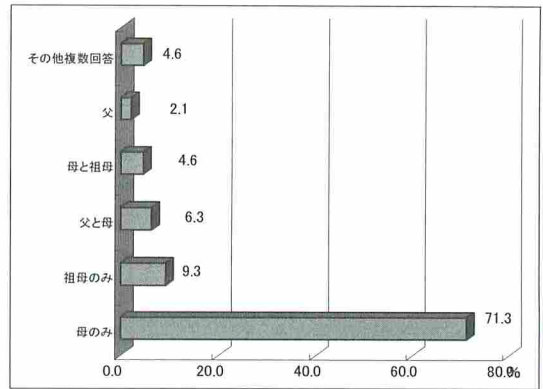


図4 中学校生徒の主な食事の担い手

⑤ 食事の担い手の数とその内訳

食事の担い手は82.7%（196名）が母、祖母、父の単独で担われていた。2名が16%（36名）、3名以上が0.8%（2名）であった。家族が分担して食生活が営まれる環境ではないことが明らかになった。また少数であるが、兄弟のみ（3名237名中1.3%）が食事の担い手である結果も出た。子食（子どもだけの食卓）が推察できる。食育の上からも課題が浮き彫りになった。（表1）

表1 食事の担い手の数とその内訳

食事の担い手数	1名	2名	3名以上	不明
ケース数 (237名中)	196 (82.7%)	36 (16%)	2 (0.8%)	3 (1.2%)
内訳	母のみ 169 祖母のみ 22 父のみ 5 — — —	父と母 15 母と祖母 11 母と姉 4 兄と姉 3 父と祖母 2 母と自分 1	父母と自分1 父母と姉1 — — — —	— — — — — —

⑥ 中学校生徒の食事の担い手と同居者（特に父親と祖母）について

回答者全員の73.4%が父親と同居しているが、父親で食事の担い手として中学校生徒の食生活に係わっているのは、10.1%であり、同居して食事の担い手となっている

表2 食事の担い手と同居者

生徒との続柄	同居者		食事の担い手		食事の担い手 ／同居者%
	n数	237名中%	n数	237名中%	
父	174	73.4	22	9.3	12.6
母	217	91.6	202	85.2	93.1
兄弟姉妹	206	86.9	10	4.2	4.9
祖父	29	12.2	0	0	0
祖母	44	18.6	35	14.8	79.6
叔母等その他	16	6.8	3	1.3	18.8

のは、13.8%であった。

同居している母親の94.0%は、中学校生徒の食事を担当している。祖母が食事の担い手として中学校生徒の食生活に係わっているのは13.9%であるが、同居して食の担い手となっているのは75%であった。祖母は、同居している場合高率で中学校生の主な食事の担い手としてその役割を担っていることが明らかになった。拡大家族等で祖母が同居の場合、就業している父母の代わり家族の食生活を担っているであろうことが考えられる。(表2)

⑦ 食事の担い手の就業状況

食事の担い手の就業形態は、有職者が74.7%、無職者が24.9%である。(表3) 終日勤務は45.6%、パート勤務は22.8%であった。(表4)

表3 食事の担い手の就業の有無

就業の有無	n数	237名中%
有	177	74.7
無	59	24.9
無回答	1	0.4

表4 食事の担い手の就業状態

就業形態	n数	237名中%
終日勤務	108	45.6
パート勤務	54	22.8
無回答	15	0.3

⑧ 食事の担い手の年代

中学校生徒の食事の担い手は、n=139人中20代が3%、30代が37%、40代が29%、50代が29%、その他が2%であった。30代～50代の働き盛りが中学校生徒の食生活を担っていた。(図5)

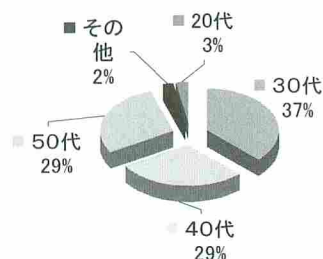


図5 食事を作る人は何歳ですか (n=139)

⑨ 祖母との関係について

郷土の食文化継承に影響があると思われる祖母との関係は、同居が18.6% (44人)で、非同居が81.4% (192人)であった。非同居であるが自宅の近くに祖母が住んでいるがn=237人中42.2% (100人)で、祖母が近隣に不在が35.0% (83人)であった。

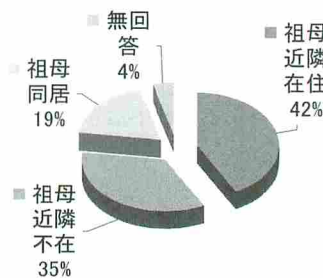


図6 中学校生徒と祖母との関係 (n=237)



祖母の同居または、自宅の近くに住んでいるのを合わせると全体の61%であった。中学校生徒の半数以上は、祖母と交流で祖母から郷土の食文化についてなんらかの影響を受けていると考えられる。（図6）

⑩ 仏壇の有無

中学校生徒の家庭に、仏壇がある生徒は62%、ないと答えた生徒は38%であった。（図7）

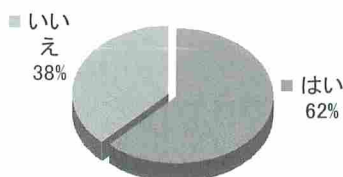


図7 あなたの家に仏壇がありますか（n=235）

(2) 中学校生徒の学校給食について

① 学校給食が好きですかの問に対して好きが41%、どちらでもないが52%、嫌いが7%であった。（図8）

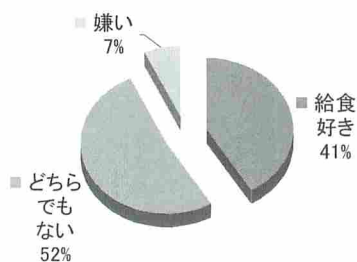


図8 給食が好きですか

② 好きな理由は、みんなと一緒にたべるが27.5%、好きな献立があるが25.0%、栄養バランスがよいが18.0%であった。家では出ない料理がでるが14.5%であった。（表5）

表5 給食が好きな理由

好きな理由	人数	%
栄養バランスがよい	36	18.0
安全、安心である	23	11.5
みんなと一緒にたべる	55	27.5
好きな献立がある	50	25.0
食について学べる	4	2.0
家では出ない料理がでる	29	14.5
委員会活動が楽しい	3	1.5
計	200	100.0

考察とまとめ

食事の担い手は、母親や祖母が単独で担っていることが明らかになった。特に、同居している母親と祖母が中学校生徒の食事の担い手として高率であるので、母親と祖母の食意識や食行動は、中学校生徒の食生活に影響を与えていると考えられる。

父親は同居しても食事の担い手として生徒の食生活に関与することがほとんどないことが浮き彫りになった。また、食事の担い手の74.7%が有職者で終日勤務が45.6%、パート勤務は22.8%であった。

今回の結果から次の3つのアプローチで学校給食から食育を推進することが大切であると考えられる。

1つは、食の担い手である母親や祖母に向け食育を推進する。特に母や祖母には、「食」と健康についての情報や成長期の食事の大切さ伝えることが重要であると考えられる。例えば、沖縄では、病人用の滋養食としてシンジ（煎じ汁）を作る風習がある<sup>7)</sup>ので、かぜが蔓延する時期には授業参観日にミニ健康展等でシンジムン（豚レバーの入った煎じ汁）の実物展示をする。家族の体調に合った食に関する情報を提供することが必要である。

また、伝統食を継承してゆくために郷土料理の得意な祖母を講師とした料理教室を開催すること等が考えられる。

2つめは、父親に向けに食育を推進する。生徒が望ましい食習慣を形成し食の自己管理能力を育成するためには、食生活の基礎となる家庭での食

環境の影響は大きいと考えられる。また、家庭がよりよい食生活の実践の場として機能するために食事の担い手の拡充が必要と考える。今回、父親の食生活への関与が薄いことも明らかになった。父親が食に関して興味関心を広げる手だてが必要と考える。例えば、学校には父親の会があるのでその会と連携をとって「お父さんの料理教室」など父親が家庭の一員として食育に係わっているプラン等が実践できると考える。

3つめは、共稼ぎを意識した食育を推進する。主な食事の担い手が7割が有職であり、約5割の担い手は終日勤務である。例えば、学校給食だよりも簡単に栄養バランスのとれた朝食や郷土料理を学校給食の献立から情報を提供すること等が考えられる。また、土曜日の午後などPTA活動等で親子クッキングの実施により有職者の母親への働きかけが望まれる。

学校給食については、好きが41%、どちらでもないが52%、嫌いが7%であった。好きとどちらでもないを合わせると93%であり嫌いがわずか7%であるので中学生への学校給食からのアプローチは教育的効果が期待できると考えられる。

祖母と同居については、「同居している」と「非同居で近隣にいる」をあわせると61%であった。沖縄の伝統的な郷土料理は、これまで祖母を要めに伝承されてきた。そのため6割の中学生生徒は、同居する祖母や近隣に在住する祖母から食生活についてなんらかの影響をうける可能性があると考えられた。また、同じく中学校生徒の62%は、祖先を祭る仏壇を有する家庭で生活している。これは、他府県にはみられない独自の文化である。

沖縄の人々は、祖先を大切にしてきた歴史がある<sup>8)</sup>。沖縄の年中行事の約60%が祖霊に感謝してその霊を祭る行事であった。古くから沖縄の食文化は、仏事（祖霊祭）を中心に年中行事が営まれてきた。祖先が、子孫を守って下さると信じ祖霊祭をアドバイスするお年寄りの存在は大きい。年間をとおして行われる祖霊祭は、家族は、お年寄りを行事を遂行するアドバイザーとして大切にしてきた<sup>9)</sup>。

このような伝統的なあり方から推測すると祖母の存在や仏壇の有無は、中学校生徒の郷土料理に関する意識、行動に影響があると考えられる。

沖縄の伝統食は、祖先を祭る行事を中心に伝えられているので祖先を祭っている仏壇の有無は、中学校生徒の郷土料理に関する食生活に影響があるという可能性が考えられる。

今後、中学校生徒の食生活を改善し食文化を継承していくためには、生徒自身が健全な食生活を実践することができるよう食育を充実するとともに、生徒を囲む食環境の実態を踏まえ、食の担い手を支援する食育や担い手拡充のための食育を検討していく必要があると思われる。

## 文 献

- 1) 食育基本法（平成17年6月制定 法律代63号）
- 2) 沖縄県食育推進計画（平成18年3月策定）  
「食育おきなわ（万人）うまんちゅプラン」
- 3) 厚生労働省平成12年都道府県別平均寿命
- 4) 沖縄タイムス「長寿」取材班：沖縄が長寿でなくなる日 岩波書店、東京（2004）
- 5) 鈴木信 沖縄タイムス平成14年12月18日
- 6) 沖縄タイムス平成19年12月18日
- 7) 沖縄県スポーツ振興審議会（平成18年3月30日）子どもの体力向上の総合的な方策について（答申）
- 8) 新島正子 私の琉球料理 P69 18~19
- 9) 尚弘子 南の島の栄養学（1988年）
- 10) 尚承・高良菊 おいしい沖縄料理 柴田書店（1995年）P6 12~13（尚弘子執筆）